「信仰によって義とされて」

ローマの信徒への手紙３章２８節
ガラテヤの信徒への手紙３章２３－２９節
森島　牧人　牧師

ここしばらくは教会の暦に従って、イースターからペンテコステに至る間のことを学んできました。今朝はパウロの書簡に戻りたいと思います。

今朝のこの主日礼拝には、長く信仰生活を続けて来た方もおられますし、信仰を求めて出席している方もおられます。さて、その＜信仰＞、私共の信仰とはどういうものなのでしょう。これは、求道者はもちろん信仰生活の長い方にとっても、また短い方にとっても、高齢者にとっても青年にとっても重大な問題です。

日本のことわざに「いわしの頭も信心から」というのがありますが、これはいわしの頭のようなつまらないものでも信心次第では有難いものになる、つまり外はどうであれ、私共の内に精神力と信心があれば、いわしの頭もどうにでもなるということを、言っているのです。

今日の聖書ガラテヤ３章で、パウロはこの信仰を非常にユニークな方法で説いています。「信仰が現れた」と言っているのです。「信仰が現れる前には、わたしたちは律法の下で監視され、この信仰が啓示されるようになるまで閉じ込められていました。こうして律法は、わたしたちをキリストのもとへ導く養育係となっていたのです。わたしたちが信仰によって義とされるためです。しかし、信仰が現れたので、もはや、わたしたちはこのような養育係の下にはいません。」（ガラテヤ３：２３－２５）と書いています。

＜養育係＞とは、現在で言えば両親や教師など子どものことを大切にしている人々を指しますが、当時の養育係は、閉じ込めて監視するという子どもに恐怖を与える存在でした。キリストが来られるまで恐怖をあたえる養育係であった律法。しかし、信仰が来て、恐ろしい養育係の監視の下にあった暗い時代は終わったと、パウロは言っているのです。

ここでパウロの言う＜信仰が来た＞ということは、明確に＜イエス・キリストが来られた＞ということを意味しています。つまりキリストが来られてすべては新しくされた、現実の状態すべてが変わったと言っているのです。それまで律法の支配によって監視・監禁されていた状態は終わり、解き放たれた自由な時代が来た、それをパウロは信仰が来たと表現しているのです。彼はこの表現をこのガラテヤ３章でのみ使っています。

キリストが来たということは信仰が来たということ、新しい現実、新しい生き方が主イエス・キリストが来られたことによって現れたと、つまり大事なことは、信仰とは私共の気の持ちようといった精神的な回路ではないということです。信仰とは私共の心や精神に重心があるのではなく、実に＜私共の外にその根拠がある＞というのです。

キリストが来られたので信仰が来た、キリストの到来によって全世界に新しい現実が来たのです。信仰とはこのキリストにあり、このキリストの中に自分を持つことと言っていいでしょう。この時、自分の中にある苦しみや悩みなど様々な思いのすべてをキリストにお渡しする、私共の外におられる方にお渡しすることが出来るのです。

この＜キリストが来られた＞ことによって私共に与えられた神からの＜賜物＞、それが私共の＜信仰＞ということです。私共の外に主が来られ、その方につながる、その事柄の中で私共の信仰が神からの賜物として生まれたということであって、私共の力や精神で作られたものではないのです。

私共の信仰が神からの賜物であるなら、まず先にある重要なことは、キリストが来られたことです。私共が信じたから救われたのではありません。つまり、自分に信仰があるか無いかさえ分からないのが私共です。しかし神はそんな私共と共にいてくださる、つまり信仰とはキリストが共にいてくださること、キリストにつながって共に生きることが出来ることです。キリストに伴われる、そしてその状態を私共は感謝している・・・これが私共の信仰です。

ここで私共は、もう一度自分自身の信仰について考えるべきかもしれません。私共が頑張ってではなく、まさに私共のために主イエスが来てくださった。そのことによって私共は生かされているということ、その感謝の中に信仰者として生きて行きたいと思います。

（説教要約　羽入田悦子）